

## 打成一片田地

だ じょういっぺん でんち  
打成一片の田地



四月も半ばになりました。桜の季節も終わ  
り、恵林寺の庭園も、柔らかい新緑の翠が  
鮮やかに目を惹く季節となりました。

さて、今回の禅語です。

だ じょういっぺん でんち  
打成一片の田地

「打成一片」というのは、「打って一片となす」こと...「打つ」は  
意味を強め、語調を整える言葉です。

ばらばらになっているものをとり集め、しっかりとまとめ上げて、団  
結させて事に臨むことを「打って一丸となす...」などと言います  
が、それと同じです。「一片」に、一つにすることです。

「田地」とは、ここでは、私たちの「心」をさしています。

田畑に種を播けば、稲や麦、大根やニンジン、白菜やほうれん  
草...さまざまなものが出穂をもちます。どのような実を結ぶか  
は、その人次第...畑も田んぼも、正直です。ごまかしはききませ  
ん。ただ、大切なことは、どのような種を播き、どれだけ手間暇を  
かけて世話をするか...

播かれる種は、その人の志...

育てるための努力は、その人の修行精進...

実る果実は、その人の人生、生き方...

志も精進努力も、結局、その人の心の問題です。農家であれ  
ば、田畑を見れば、その人の志がわかり、日常がわかり、生き方  
が、人となりがわかる。だから、心を田畑に譬えるのです。この禅

語での「田地」はまた、「心田」とも「心地」とも言います。  
心は、大地なのです。私たちはそこに、志の種を播き、失敗を重ね、経験を積みながら、自分自身のいのちを育てていくのです。それでは、この「田地」、いのちの根源を守るには、どうすればよいのか...

天然自然の大地に生きる農の営みが過酷なように、こころの大地に生きる人生の営みも、決して容易ではありません。

大地には豊かな場所も、痩せ衰えた貧しい場所もある。どれほど肥沃な土地であっても、あるいは灼熱の太陽に焼かれ、あるいは荒れ狂う河川の奔流に洗われ、あるいは激しい雨に叩かれ、またあるいは凍てついた氷に覆われたりもします。

こうした逆境の中には、避けることも、変えることもできないものがある。私たち人間は、自然を前にすれば、あまりにも非力です。

しかし、その時には、ただ、黙々と種を播き、畑を耕す。

自分の人生は、自分だけのもの。人と比較することはありません。

収穫の量を競ってキョロキョロ辺りを見回す必要はないのです。

失敗に後悔し、絶望している暇もない。ただ、自分自身のいのちを守り、生き抜くことなのです。そのために、ただひたすら進む。

「打成一片」... やることなすこと、そのつどそのつど、ただそのこと一つになりきってやる。黙々と、脇目もふらず、一心に務めればよい。修行とは、この「打成一片」の姿を言うのです。

... 如来の端坐、少林の面壁、打成一片にして他事無し...

といます(『坐禅用心記』)。

仏様(如来)や達磨さん(少林)のような特別な人が坐禅(端坐・面壁)しているから貴いのではない。ただ、「打成一片」であるから素晴らしい。ただそれだけのことなのです。

